# 身体のような建築

伊東豊雄
建築家

開く、閉じる。
自分の身体というものが、個人的なものが外に出ていって、
それが社会的なものに変わっていく。
そのプロセスが建築。

伊東豊雄先生は、「山のシューレ 2009」のテーマ"言葉・身体・環境"について「まさにぼくにぴったりのテーマ。言葉を喋っているあいだはまだ自分の身体だが、自分のつくる建築と自分が話すことはオーバーラップしている。漢字と仮名が混じった日本の言語空間のなかで建築を考えてきたことは、たいへん自分に合うものだった」と、言葉とご自身の建築作品との相性からお話を始められました。

伊東先生は若い頃に、武満徹の音楽と文章から大きな影響を受けたといいます。耳を澄ますような言葉によって育てられた、その創作活動に響くいくつものテーマを水先案内にして、作品をご紹介くださいました。

「いつも"水"が頭の中から離れない。15 年くらい前に、長野県の諏訪湖のほとりに、町立の小さな博物館をつくった。諏訪はぼくが育った土地で、博物館から 2 キロほどのところに生家があった。家は諏訪湖に面していて、庭から湖に出ることができた」。「毎日、湖を眺めて、釣りをしたりトンボを採ったりして過ごした少年時代。ぼくが仕事で描く水は、この湖の静かな水」と、幼少期の体験の影響を語られます。

水は常に刺激を受けるテーマで「絶え間なく流れていく、何かモノとモノとをつなげていく」イメージが、作品に込められているとのこと。そこから"波紋"というモチーフも生まれました。

この波紋はまた、武満の音楽のイメージとも前なり、伊東先生が捉える日本の言語空間にもつながります。「ある言葉を投げかけると波紋のように、イメージがそこから広がり、次の言葉を捜しだしてくる。波紋と波紋とが重なり、オーバーラップしてつながっていく。そんなイメージが建築をつくるときにいつも響いている」。

さらにこのイメージが「せんだいメディアテーク」にも生かされていると、ノートに描いた初期のスケッチを見せてくださいました。「壁で囲まれたような部屋をつくりたくない。たとえば同時的に、床の中に柱があって、その柱から、なにかエネルギーや光が広がり、場をつくっていく。それがあちこちに大きいもの、小さいものがあって、だんだん場所の違いみたいなものができてくる。空間はどこまでも広がっていくイメージだが、現実には、どこかでカットされる」。

建築をつくることは、当初の水のような融通無碍な広がりのイメージが「だんだん固まってきてしまう、あぁ、また失敗しちゃったか」という思いとのせめぎ合いだといいます。せんだいメディアテークは、「それでも、かなり通常の建築に比べると自由度が高いので、なかにいても公園にいるようなイメージが実現できた」と満足げにお話しになりました。

"波紋"の次のテーマは、"能"についてでした。「橋の会」の主宰の 1 人である土屋恵一郎氏との出会いから、能の身体の持つ動き、その「不安定さのバランス」に惹かれるようになったそうです。「シンメトリーな状態で立っていても、なにも生まれない。お能の身体は、イメージを動かすために

必要なことを感じさせてくれる」と、能の動きがもつ秘めたるダイナミズムの魅力を建築に生かしたい、とお話しになられます。

最後に、それまでとはまるで正反対のイメージが浮上します。活動の初期の頃から「建築ができあがると地下空間のようなイメージができてしまうことがある」そうです。30 年前以上につくった小さな住宅、09 年にデザインされたカリフォルニア公立の大学のアート・ミュージアムのデザインなどがその例で、「明確に分節されている空間でありながら、どこかで地下を連想させる空間に変わっていく。その変化を楽しんでいきたい」と、閉じる空間に感じ続けている魅力を明かされました。

近年に手がけられた多摩美術大学の図書館、09 年に高円寺の駅の近くに手がけられた区立劇場は「公共建築は町に開かれているということを建築家は言いたがるが、あえて閉じることによって何か秘めやかな場所をつくり出したい」という思いが込められています。

じつはここにも、伊東先生の子供の頃の身体的な記憶が息づいているようでした。「小さい頃、祭りでサーカス小屋が建つ。こっそり行っては、幕の下からめくって覗き込んだりした記憶がある。どうなっているのだろう、と思うような、そういう小屋のようなイメージをつくり出したかった」。

幼い頃に、心奪われて観察した早朝のトンボの羽化。それは「朝日に輝いて、最初は乳液のように美しくカタチのない羽が固まって、次第にカタチになっていくような。そういう過程が一番おもしろい」という懐かしい記憶です。

「自分のなかのイメージがだんだん外に出ていく言葉のように、スケッチとなり、少しずつ固まって建築となり、でき上がったときには完全に自分を離れて社会の存在になる。そういうプロセスが建築ならではのおもしろいところ。言語・身体・環境という 3 つの言葉が、その過程を切実に物語っている気がする」と、「山のシューレ」のテーマにしっかりと結んでくださいました。